# アブサント

元内和弘

我々には緑の時間という物があった。現世の苦しみの全てを忘れていられる午後5時から6時の一時間の間をそう呼ぶ。いつだってその時間になればエメラルド色に染まり、輝かしい妖精と戯れられた。至福に満ちる為に待つ1時間の空白では、ボーっと宝石の雫が落ちていくのを眺める。

文字を書いて単語に組合す。単語を並べて文節ある文章を作る。文章を列ねて段落を綴っていく。段落を積み重ねてこそ、ようやく物語とメッセージが込められた冊が紡がれた。

私が芸術と信じ込んでいるこの行為は、まるで広大なる大海原を一人で漕ぎだすような物である。コンパス等という物はなく、決してその先に新大陸があるとも断定しえない。新大陸に着こうとも、足を踏み入れた瞬間原住民と風土病によって死ぬ可能性だって十分にありえる。

私はふと真っ白な紙を前において、そんな事を考えだした。哲学者になるにはまだ暇でもないのにも考え老けるのを辞められない。

「余りにも救いがない」

筆を動かしながら呟くような事でもなかった。自分が憂鬱になるだけと知りながら、何故人は自虐や後悔をするのか気が知れない。それを次から改善する方法を考えた方が有効な時間の使い方なのは明らかであるのに。

「救いはあるさ」

テーブル上には掌くらいの妖精が一人腰を降ろしていた。エメラルド色の髪とクリスタルのように透き通る肌。甘美な声の響きは聞く人を落ち着かせ、心地よい気持ちにさせてくれる。その時だけは全ての悩みから脱せられるような、そんな気にさせてくれるのだ。

「そろそろワタシと会話をする時間のはずだよ」

時間は午後5時を過ぎていた。テーブルと椅子とタンス、ベットしかいない小さなワンルーム。換気すらまともにできない小窓の外の天にはオレンジ色と紫色が混じりあっている。流れる雲と共に、オレンジ色を追いやる紫色。その勢力の拡張は素早く、部屋は既に真っ暗に染まっていった。

「ワタシを無視する気なのかな」

ずっと話をかけてくる妖精から、私は顔を逸らしたまま小説を書き続けた。今は誰かと戯れる時間などない。心地よく呆ける時間が、今は存在しないのだ。

小説家を目指して数年が経った。けれども私には何一つ道が見えてこない。いつ危険が襲ってくるかも分からない、誰一人立っていない霧の街で歩いている。養わせるべき家族もいるのに、余所見をしている時間等存在しない。存在しえない。

「ワタシは君の悩みを知っている。君が何に悩み、藻掻き、苦しんでいるのかを知っている」

妖精は偶然見かけた時から、いつだって私を呼んでいた。どんな場所にいても、誰と居ようと、時間とは無関係に、視界の片隅から離れてはくれない。

「今は構ってる時間がないんだ。私は自分の子供にすら構っていられない。それに家族だって、私の全てを知っている」

「それは嘘だ。嘘だと自覚のある嘘を吐くなんて、一番やっちゃいけない事じゃないのかな」

手を振ろうとも触れられない妖精は、いつの間にか肩に乗っかっていた。重さは感じられなくとも、確かな声が聞こえる。それでも薙ぎ払う術がない。

「家族が苦しみを理解しているなんて、本気で言ってい

る訳じゃないよね？」
　反応する事なく、見向きもせずに字を書き続ける。
「家族の苦しみを分かっているなら、君はここで文字を書いてないはずでしょう？　家族の為にもっと金を稼がなくてはならない。その為に他の努力をしているはず。そうしないのは君が独善的で利己的で主観的な観点しかないから」
「それでも私は家族を愛している」
　見向きもせずに字を書き続ける。
「愛？　君に取って愛とは放置し、大切にする事もなく、幸せにさせる為の如何なる努力もしていない状態の事をいうのかな」
「何が言いたい」
　字を書き続ける。
「君が愛しているのは君自身だけ。そして目の前にいる小説だけって事だよ」
「私は決してナルシストではない」
　確かに、今は幸せにさせていない。だが本が売れれば、知名度が上がれば、名声を握る事が出来れば、きっと家族も私も皆も幸せにできる。そう信じているからこそ、ここまで頑張って来れた。
「努力は人を裏切らないから」
「勿論さ。努力は決して人を裏切らない。いつまでも胸に残り、糧となる。但し、結果は裏切る」
　妖精は目を細くして微笑む。それはこちらを徹底的にあざ笑っているような、からかっているような厭らしい微笑だった。思わず睨みつけると妖精は更に楽しそうにテーブルの上にあったティーカップをベットに横たわる。
「そんな睨みつけないで欲しい。ワタシは君の手助けがしたいだけなんだ。君の芸術への恋が叶うのを手助けしたい。それだけなんだよ。家族なんかには絶対できない芸当だとは思わない？」
「なんか、だと」
「なんか、だよ」
　友達でもなく、最も身近な人々を「なんか」等と無視された時、私は怒りを耐えられなかった。思わず妖精が入っていたコップを手で薙ぎ払い、地面に落ちたコップが音を響かせて割れてしまう。
「一時の感情でワタシを拒んでも無駄だよ。君には気概がない」
「私に何の気概がないと言うんだ」
「何かを絶対に成し遂げようとする気概」
　妖精は床に溶けて染み込んでいくように消えていった。割れたコップだけが沈む直前の夕日を反射させる。
　その後も下らない妖精の言葉は頭の中を掻きまわした。結局まともに話を進ませる事すら叶わず、また一日が過ぎていく。

　午後、私は水で浸したハンカチを頬に当てて家に帰ってきた。知り合いと口論になり、それが膨れ上がって爆発してしまったという所だが、正直どちらもクソみたいな態度を取ったのが一番の問題だったのだろう。
　殴られてみれば色々気付かされた。痛みを覚えながらも、片方では何故相手が自分を殴ったのか等を考えてしまうのである。相手の悪い点、自分の悪い点、互いにこうするべきだったという気持ちが押し寄せてくるのだ。そうしていると気持ちもなんとなく静まり返る。
「あそこで皮肉を言ったのは、私が悪かったな」
　椅子に座って自分の八つ当たり混じった言葉に反省していると、またもや妖精が表れた。ガラスのリムに座って、宙に足を振っている。時々、その足がガラスに当たれば、水玉が落ちるような澄んだ音が部屋に響いた。
「派手に殴ったね」
「そして殴られた」
「頭は晴れた？」
「いや、とても鬱な気分だ」
　ペンを取って原稿と向き合う。しかし顎と頬にかけての痛みが走る度、色んな事を思い返してしまって気が散った。知り合い、それも友達との溝。埋めるにはどちらかが一歩を譲れるだけ。
「そこが難しいんだよね」
「そうだな」
「君が感じているその気分、ワタシならどうにかしてあげられると思うけど？」
　以前よりも大きくなった妖精はテーブルの上に置かれている角砂糖の瓶を指で叩いた。腕くらいはある身長でも瓶を自分で開ける事はできなかったが、時々私の手をその瓶へと運ぼうとする。
「一つ。砂糖一つで良いんだけど？」
「もう、お前には頼らないって決めたんだ。もう約束したんだ」
　緑の時間に身を任せる事は、とても心地いい。始めて経験した時も、その心地よさにはまってしまった。ただ待つ時間ですらも美しく彩らせる体験には、何度もセンチメンタルになって、内なる感情のありったけを外に吐き出せるようになる。
　けれども、そうだとしても私は一線を超えてはいけない。悪魔との契約などと大袈裟な事を言うつもりもないが、この緑の妖精に頼った時、私は今度こそ取り返しのつかない事になるだろう。

「決める、約束、何故そんな下らない物に拘る？」
「幾らお前が私に字を書かせるようにしてくれるとは言え、もう手を出さないと家族にも誓った。それを破っては、取り返しがつかなくなる」
「人生の中で幾度となく決めた事を曲げてきたはずなのに、嘘も喋ってきたはずなのに、何故今更遠慮するのかが分からないよ。ワタシに誘惑を感じるなら、緑の時間に魅力を感じるなら、それは君が本当に望んでいる事だから。君が望んだ事を、何故君が否定する？」
頭の中に直接語りかけてくるような声は、的確に完全に私を見透かしていた。全てを知っていて、重たい鎧で固めた意志を圧し折り掛かってくる。
妖精の声はとても穏やかだった。風吹く水面のように綺麗でありながらも小さく波打つ。自然のやる事に怒りや意志が込められていないのと動揺に、かの物もまた誘惑するという目的以外の一切を持っていない。だからこそ、耐えがたかった。
「っ！」
気付いた時には、私は穴の空いたスプーンに角砂糖を乗せていた。どうにか正気を取り戻して砂糖を戻し蓋を閉じる。
「直になる事を美徳だと思わないのかな？」
「切除も美徳だと思っている」
「ワタシだけが苦しみを分かってあげられるから、いつだってここにいるからね」
またしても、いつの間にか妖精はいなくなっていた。静まり返った部屋の中で、水で喉を潤しながらもどうにか文章を書き連ねる。
とうとう、家が空っぽになった。元々小さい部屋から出なかった私だったが、もはや部屋を出ても誰もいない。養育の権利はあちらが持っていき、もう直ぐここも整理して住む場所を探さなければいけなくなる。まだ数ヵ月後の話ではあるが、目の前にあるという事実は変わらない。
「これで二人ぼっちだね。人は一人だけど」
家族が皆離れて尚、妖精はそこにいた。それを何処となく、「良かった」と感じる自分がいる。嬉しいのではない。
ただ得体の知れない、気持ちの悪い安心感を抱けるだけだ。
「どうやら家族は君の苦しみを分かってくれなかったらしいね」
「これは全的に私自身の責任だ。余りにも不幸にさせてしまった」
荒ぶる後悔の波が押し寄せてきた。椅子に座ったまま、机の引き出しにあるロープを見下ろす。
「そんなに悩みこまなくても良いんだよ？　ワタシがいるじゃない。いつだって、何処でも君はあの幸せな緑の時間に浸れる」
引き出しをしまって、再びペンを握った。妙な考えなんてしちゃいない。ここまで転がり落ちてきたけど、まだ昇れる意志が残されている。
「なら、尚更ワタシを使うべきだよ。あの緑の時間に浸っている事を、君は心地よく感じたはずだ。あの時書いた作品は、今までのどんな物よりも評価されたんだから」
「あれは、偶然だった」
「あの作品を書きあげるのに数ヵ月が掛かったのにも？　その期間全てが偶然だったという気なのかな」
小さな部屋にミントの香が漂った。妖精に目を向ければ、普通の子供くらいの身長になっている。こちらかは手を振っても触れられないのにも、そいつは私の手を強く握って瓶に届かせた。
「くっ」
「もう家族とした約束なんて守らなくても良いんだよ？　その必要はどこにも残されていないんだよ？　ならば、自分のやりたいようにやらないと」
左手で自分の右腕を握り、紙の上に戻した。妖精は強い力で腕を動かそうとするが、震える手を持って字を書き続ける。もう直ぐ終わりだ。
「もう直ぐで渾身の作品が出来上がる」
「おめでとう。でもワタシがあれば、更に良い作品になるのを、君は知っているはずだよ？」
必死に頭を振って否定しようとしても、自分だけは騙せなかった。原稿を読む度に思い浮かぶそれを、ずっと囁いてくる妖精。体と共に大きくなったそのエメラルドの瞳は、完全に私を捉えていた。きっと自分で鏡を見るよりも確かに、私すら知らない奥底の底までも。
「後がないからこそ、使える全てを使うべきだよ。でなければ本当にもう取り返しがつかないよ？」
「私はもう、これ以上自分を壊したくない！　貴様がなくてもちゃんとした作品を作られる。その力がきっとある。積み重ねがある！」
目を瞑って、誰もいない部屋の中で一人叫びをあげた。瞼を開くとシーンとした淀んだ空気だけが回りに広がっている。
一人で文字を書いているだけなのにも、何故か悪寒がした。幾ら服を厚く着ようとそれは治らない。
「クソ、文字が」
妖精がないのにも手の震えは止まらず、結局ページを

破って新しい原稿を用意した。もう余り残っていない。もう直ぐ報われる時が来る。また何もかもをやりなおせるはずだ。

眠れぬ夜が続いた。何もないのにもイライラとし、不安と焦燥感に苛まれる日々は絶えない。緊張感を感じ始めれば腹痛で身を起こせられなかった。

「結果が、出たね」

「ああ、結果は出た」

「満足？」

結果は私を裏切った。結局私の渾身はどこにも届くことなく、散り散りと散らばり、やがて無に帰したのである。

「満足していないの？　君が選んだ道なのに、満足していないの？」

妖精の問いに、私は何一つ答える事が出来なかった。呆然と結果の前で、努力の積み重ねをゴミ箱に放り込む。

「友達も、家族も、君自身すらも君を裏切ったけど、安心して？」

既に私よ同じくらいの大きさにまで達した妖精が嬉しそうに微笑んだ。不幸を笑うのか、それとも慰めているつもりなのか。

その意図が何であれ、私が感じれるのは苦しみの他になかった。

「さあ、もう君を縛る物は何もない。関係も約束も拘りも期待も崩れたんだから」

抗う事もできず、私は角砂糖を穴の開いたスプーンの上に乗せた。夕焼けが紫色に染まっていく午後5時、私はぼーっと砂糖が溶けていくのを眺める。

コップに一滴、また一滴と緑色の静香が落ちていった。それは積もりに積もって、一時間をかけてじっくりと流れるエメラルドを成す。

「さあ、これで君は苦しみを忘れられる」

もはや何も考える事なく、苦しみを忘れる為に手を伸ばした。何が苦しいかをふと考えると、何よりもまして今自分が手を伸ばしているという事実が苦しいという事に気付く。

だがそれを気付いた時には、既に私はガラスを空けていた。

そして、手の震えが止まる。悪寒が消え、心地の良いミントの香が体中に広まった。背凭れに体重を任せ、小窓を見上げる。日が沈むのを見て、綺麗だと感じれたのはどれ程ぶりなのか分からない。

不思議と手が進んだ。今まで数ヵ月かけても出せなかった感情的な繊細がこの手に宿り、滑っていくように白い紙に黒い物語を書き連ねていく。数時間、数日を角砂糖を妖精に渡しながら手を動かした。

その時だけ、現世の全てを一度引き出しに、ロープと一緒にしまっておける。

「やっぱり、君には力があるんだよ。ワタシと一緒なら、全ての感情の爆発を解放できる技術がある君なら」

「そういう事にしておきたい。今は、どういう事に」

でないと余りの羞恥に耐えられないだろうから。でないと今すぐにでも追いかけてくる苦しみの波に追いつかれてしまうから。

「幸せ？」

「苦しい。でも何故だろう。悪い気分になれないんだ。とても苦しいのに、空でも飛べそうな気分なんだよ」

「良かったね」

全てを失ったにも関わらず、目を瞑っただけで簡単に眠りにつけられた。「全てを失ったと」いう惨めさが、妖精に砂糖をあげると共に、私の中で「全ての荷を降ろせる」という勇気に変わったのだ。

「ああ、本当に良かった」